

第35号 華山会報

平成27年11月1日

公益財団法人華山会

思えば思わるる

田原市長 山下政良



「思えば思わるる」ということわざがあります。自分が相手に好意的になれば、相手も好意的になってくれるという意味です。私自身、国際交流の場で何度も体験したことです。言葉も、文化も異なる海外の人々と分かり合えたのは、まさしく「思えば思わるる」の精神があったからだと思います。

渡辺華山先生も若い頃から、藩からの支給金が一律に減額され、貧しい暮らしをしていたにもかかわらず、困っている人に着物を与えたり、近所に商売をできずにいる元魚屋の親子にお金を与えたりして、商売ができるようにし、お札に魚を持って来た時には、お金だけを支払い、戻したというエピソードもあります。天保の飢饉が始まる頃、殿様に対して、「数万人の内、たとへいかにいやしき小民たりとも、一人にても餓死流亡に及び候はば、人君の大罪にて候」と殿様に進言しています。飢饉に備えるための「報民倉」建設も領内の人々のために、皆を救おうという気持ちの表れが人々を突き動かさし、材料の提供や労働奉仕に参加した人が多くいました。また、姫路から養子に入った殿様の三宅康直侯も現地を視察し、飢饉の救い米以外に持ち出しを禁じたとのことです。立場や意見が異なることがあっても、「地域を良くしたい」という、共通した思いがまとまり、コミュニケーションを強くしたのであるうと思えます。

私は、「渥美半島を元気に！」と発信してまいりました。その根底にありますのは、先人により築き上げられた、この宝物のような渥美半島を、さらに元気にしていきたいという思いと、郷土を愛する気持ちの表れです。これまで、地域の人々の知恵と情熱により成し遂げられた、田原市の目覚ましい発展を目の当たりにしてまいりました。これからは、教育環境を拡充し、「幼児から老後まで、豊かな希望を持てる田原市」をイメージして、市政に取り組んでまいります。地域の声にしっかりと耳を傾けるとともに、新たに設置した総合教育会議も活用し、教育環境全体の向上につながるよう努めていきたいと思えます。今後とも、この、「思えば思わるる」の精神を人づくりにもいかし、大事にしていきたいと思えます。そして、誰もが、そういう気持ちになれるような、元気な渥美半島をつくってまいりましょう。



田原城跡桜門

新たな風に乗って

田原市教育委員会

教育長 花井 隆

平成二十七年四月、新しい教育委員会制度発足に伴い、田原市教育委員会の新教育長として就任いたしました。したがって、今までの委員長はなくなり、教育長が代表として具体的な事務執行の責任者となり、具体的な指揮監督者としての活躍が期待されています。

新たな変更点としては、首長が教育長を直接任命することにより、任命責任が明確化します。任期は三年です。また、首長が招集する総合教育会議が開催され、委員がこれに参加し、教育行政の大綱を策定したり、教育施策や児童生徒に関わることを協議したりします。

こうした制度改定により、首長の教育行政に果たす責任や役割が明確になり、首長が教育政策について議論することが可能となりました。また、首長や教育委員会が協議・調整を尽くし、両者が教育政策の方向性を共有し、一致して執行に当たることが可能となりました。

このように、新たな制度のもとでの教育長ということ、市長として

の教育長ということ、市長としてやり連携しながら、そして、各委員と意見や情報の交換を積み重ねていきます。そして、田原の教育のあるべき方向性をしっかりと捉え、強い自覚と責任のもと、教育行政をしっかりと司る覚悟でありますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本年四月に田原市立伊良湖岬小学校が開校しました。田原市となつて初めての学校統合であり、渥美半島には久しくなかった出来事です。和地小学校、堀切小学校、伊良湖小学校の三校が一つの小学校となりました。全校児童一七八名でスタートしました。現在児童たちは徒歩やスクールバスを使って登下校し、学校、家庭、地域の連携のもと、落ち着いた学校生活が送れています。

九月十九日に行われた運動会も、賑わいがあり躍動感あふれるものとなりました。次の全校行事に当たる学芸会の盛会が期待されます。来年四月には、田原中学校に野田中学校が統合され、田原市内では十八小学

校、六中学校となります。

そうした中、各学校ではそれぞれの校区や地域の特色をいかした「ふさと学習」が盛んです。

田原中部小学校では、四年生が中心となつて、「けんか風合戦に挑戦しよう」をテーマに、田原風保存会の協力を得て、風作りから風あげまでの学習を実践しました。本年五月、五、六年生が赤組と青組に分かれて、「けんか風合戦」を展開しました。

児童による田原市の無形民俗文化財に指定されている田原風を継承していこうとする児童や学校の意気込みに拍手を送りたいと思います。

福江中学校では、生徒たちが地域の魅力を見つけ、それを活用しての街おこしを提案して、地域といっしょに取り組んでいく事業を展開しています。本年度は「ラベンダープロジェクト」のもとに、地元のみちづくり推進委員会と協働しています。



目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P① 思えば思われる 山下政良

P② 新たな風に乗って 花井 隆

P② 目次

P③ 画家渡辺華山の心象

P④ 藩主諫言の困難さ

P⑥ 渡辺華山『毛武遊記』⑫

P⑩ 少年物語渡辺華山

読書感想文

P⑭ 華山の田原行（十九）

P⑯ 公無財団法人華山会
田原市博物館からご案内



画家渡辺華山の心象

十二支図巻 田原市博物館蔵

紙本墨画淡彩

縦二七・二cm×横五五・八cm

十二支を描く画卷である。没骨法で描かれたものと毛書きを主にしているもので組み合わせられている。ネズミやウサギ、猿、鶏、犬といった実物の写生と思われるものと牛、虎、龍などの写生を元にしていないものが続けて描かれる。その絵は生命力の差となり、見る者に伝わるが、虎や龍にも古法に法った筆の走りが冴える。かつて京都帝室博物館（現京都国立博物館）に出品されて好評を博したと伝えられる。

款記・印ともに無いが、渡辺華山作品と伝えられる。「十二生肖図」と、京都の漢学者で、書家の小林卓斎（一八三二〜一九一六）による巻頭題字があり、「八十原翁題」と書かれている。明治四十三年（一九一〇）には、題が付けられ、箱書もされている。その後、大正三年（一九一四）九月に京都帝室博物館に出品されたようので、返却についての手紙が付属する。

田原市博物館副館長学芸員 鈴木利昌



(部分)



藩主諫言の困難さ

研究会員 別所興一

この数年、渡辺華山の書簡の研究にとり組んで痛感したことは、儒教道徳の説く諫言（主君の非を諫めること）の幕藩体制下での困難さである。ペリー来航を契機に徳川幕府が開国政策に転換した以降は、薩摩や長州をはじめとする諸藩で開明的な家臣が守旧派の藩主や宿老を諫言・説得して、新規の政策を採用させる場面も少なくなかった。

しかし開国以前には、新規政策に着手しようとする藩主を家老が先例重視の立場から諫言して、そのリスクを回避した事例は少なからず見られるものの、家臣が開明的な立場から藩主を諫言して、その提言が採用された事例はきわめて少なかった。そんな困難な状況にも拘わらず、家老職就任一年後の華山（数え



四一歳）は、藩主三宅康直の政治姿勢を大胆率直に諫言した書簡を上呈している。その天保三年（一八三二）月日不明の書状を、現代語訳して紹介したい。

「人の上に立つ主君の本務は、広い度量で人の特性をつかみ、真に能力のある人を見抜いてふさわしい職務に任命することです。小事に関わらないで「民の父母」という自覚を忘れないことです。小心翼翼とした態度に陥り、私利私欲の心が生じないように致したいと存じます。

しかし、お上のお側に便利な者としてご任用される者は、きっと口先がうまく、おもねりへつらう者たちで、篤実な者や気概ある者は任用されません。お上のお側にお仕える者がすべて鷹見弥一右衛門（温厚な好人物として知られた藩の用人）のような人物ばかりでしたら、有能な者がそろったと考えるべきです。

でも仮に、そんな人物が存在したとしても、私見としては一日でもそのまま放置しておくのは不適當と考えます。斎藤寛吉（藩の近習・納戸役）などはまずまず篤実な者と言えますが、最初の段階ではとても一人前の勤めを果たせるとは申しがたい水準でした。最近になってだんだんお上のお考えにかなうようになったのです。

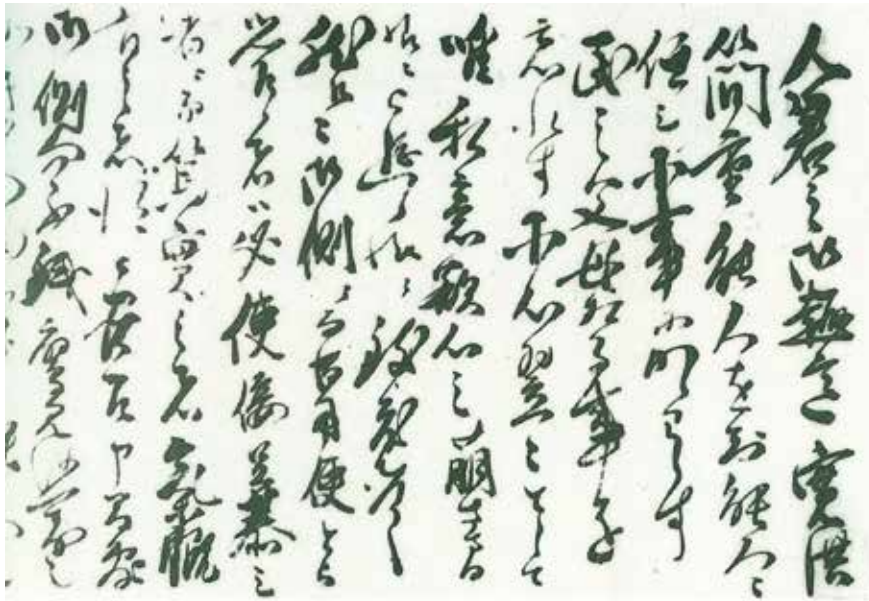
その他のお側向きの者たちをお見渡しの上、お上のお考えにかなうほどの人物かどうかよく吟味して頂きたいものです。人を讒言して罪に陥れたり、人前でこびへつらったりする心のねじ曲がった者の存在を存じ上げていますので、よくよくご吟味いただきたいのです。

他方、桀・紂（共に古代中国の暴君）が天下を失ったのも、ただただ才気に走って他からの諫言を受けつけなかったことによると考えられます。したがって禹（古代中国の名君）が洪水をよく治めたような知恵を持たず、自分の頭でよく考えて役人を任用できないようでは、国をよく治めることはできないのです。

お上としてはご自分のお好みで判断したつもりでも、自然にお側向きの下役の意向だけを重んじ、恭敬の心がうすれ、ただ軽率な気風に陥るようでは、今のお側向きの者たちの中には適当な人物がいけないこととなります。

式日の儀礼についても、七八分の内容は主に形式的な処理で済まし、恭敬の姿や心向きは見られなくなりました。こうした生活姿勢については、お上が初めてお国（国元田原）入りした頃とひき比べてお考えくださって欲しいと存じます。

伊藤忠斎（御側坊主）が家に引きこもって



る件につき、あれこれ藩の通達が出ているようですが、こうした問題は、恐れながらお上ご自身で判断処理してください。結局のところお取次・お納戸・ご近習・お次番・お坊主の者たちは、それぞれ自分の眼鏡だけで見て判断し、格式や程合いを見立てています。

お上がどの役職を寵愛されるかは、それぞれ

の事と次第によります。お取次よりもお納戸を寵愛される場合もあれば、ご近習よりもお坊主を寵愛される場合もあります。その結果、お上の寵愛を自慢にし、自分の役職の本分を忘れてしまうこともあるそうです。

なおまた、お上がお風呂に入られる際のお髪の手入れや月代（さかやき）（武士が額の上の髪を半月形に剃りあげたもの）の剃役などは、それほど難しい仕事ではありません。私は三代の殿様のお風呂場や灸治療などの仕事を担当しましたが、お小言のあつた覚えはありません。御髷（おだぶる）（髪のもどりを手入れする役職）は、お納戸役の筆頭の者が命ぜられました。殿様の失笑を買ったようなことは未だ聞いたことがありません。

これらのことは、お上ご在所（姫路藩酒井家）の上屋敷をお訪ねになる際にきつとお揃いの湯衣か何かを用意せよと申しつけたりする場合があります。考えてのご心配と存じます。お髪の手入れ等についてあれこれ指示を出すよりも、他の人もあれこれ口にすることですから、みなご自身で処理すべき問題と存じます。お髪の手入れが下手だからといって、お上のご人徳が損なわれるようなことはございません。

また、お灸などは普通の百姓が据（す）えても、不都合が生じたという話は聞いたことがありません。

ん。お上が少しの不便不都合も許さず、我がままいっぱいのお暮しをする方になられるとは決して思いません。

先にお上への諫言を少なくすると申し上げましたが、私は心の中でご尤もと納得しているわけではございません。」

この書状の宛先である藩主康直は、これより五年前に田原藩の宿老が藩財政困窮の打開策として大藩から持参金付の急養子を迎えることを決議した結果、十七歳の若さで田原藩主に就任した人物である。華山はこの人事に反対して、三宅友信の擁立運動に献身した経歴を持つだけに、新藩主にはしばらく距離を置いていた。しかし家老職に就任した以上、儒教的な信念から藩主の政治姿勢に苦言を呈したのである。

康直は大藩の贅沢な環境に育っただけに、わがまま放題の生活に流れる傾向があった。儒教的な王道思想の立場から未熟で非常識な藩主を一人前の主君に育て上げようとした華山の懇切丁寧な説教（諫言）には、康直も素直に耳を傾けたようである。華山は自分の不利や失脚の危険を顧みず、藩主の人間改造にとり組んだのである。そこに華山の人間的な誠実さと勇気が認められると言えよう。

渡辺華山『毛武遊記』

12

研究会員 加藤 克己

土人云、山上に黒兵衛天狗おはしまし、火除盜賊除、きはめて神なり。彦根侯別封の地にあり。曾麴街失火の時、其藩甚あやふし。一邸の士、力をきはめ火を救ふ。その中に一士人異状なるありて、東走西奔飛鳥のごとく防火をなす。いかなる人やと司どもよりあひて、火止の後姓名をとひしかば、我ハ根本にある黒兵衛といふものなりとて、姿見えざりしとぞ。

天保二年（一八三二）十月十八日続き

土地の人が言うに、山上に黒兵衛天狗がおわしまして、火除盜賊除にたいへん力のある神である。彦根侯井伊家の別封の地にある。かつて江戸麴町が失火した時、その藩はたいへんあぶなかつた。邸内の武士たちが全力をつくして火災を防いだ。その中にひとりの武士に異常な姿の者があつて、東奔西走して飛ぶ鳥のごとくに防火につくした。どのような人だろうかと公儀の役人たちが寄り集まつて、火事がおさまつた後で姓名を問うと、「自分は根本山に住む黒兵衛という者である」と言つて、姿が見えなくなつたという。

※ **黒兵衛天狗** 根本山に住むという天狗。ここに書かれた話とよく似た話として、氷室山神社（根本山の北東約三km、群馬県みどり市と栃木

県佐野市の間にある）には赤兵衛天狗の伝説があり、やはり江戸大火の際に火消しに大活躍したという。周辺には他に黄色兵衛、白兵衛、青兵衛の天狗を祀つた山神があり、合わせて五色天狗と呼ばれている。

※ **彦根侯** 近江彦根三十五万石の井伊家。江戸屋敷は三宅家の隣。

※ **別封の地** 彦根藩井伊家は下野国に飛び地を持つており、佐野奉行を置いていた。根本山神社の位置、桐生新町からの道については前号の略図参照。

※ **麴街** 麴町。東京都千代田区。江戸期は、半蔵門外の内濠から外濠をはさんで四谷・赤坂に及ぶ地域で、町域の中央を甲州街道が東西に貫通していた。大名・旗本相手の商家が多く、享保十二年（一七二七）には藁葺の家作りが禁じられた。明治になって周辺の武家地・寺地を合併した。

※ **麴街失火** いつのことか不明。田原藩邸のすぐ隣のことで、華山も興味深く感じて書いたであろう。しかし、麴町の火事が彦根藩邸に及ぶ勢いならば田原藩邸も危なかつたであろう。江戸の火事なのに、江戸でなく桐生に伝わる話というのがおもしろい。

※ **司 公儀の役人。** なお、インターネットでは彦根侯を井伊直弼として江戸の大火を安政二年（一八五五）とする話が伝わっているが、それでは華山没後になつてしまふので明らかに間違い。

国侯甚稀有の事にしろしめし、去年石祠を営み、おさめられしとぞ。それより後はいやましに人々祈り奉りて、講中とやららん、組逢ふて安全を禱る。今山中に市をなして根本へ参るかぎりは、いづれの地にても雨傘をかし出す。そのかさうしなふ事なくて、いつか某々の家に序ありて帰るといふ。別当は大正院といふ。

藩主はたいへん珍しいこととお考えになり、去年石祠を築いて、おさめられたという。それより後はいよいよ人々がお祈りするようになり、講中というのであろうか、団体となつて安全をいのる。今は山中に市をなしており、根本山へお参りする人には、どの地においても雨傘を貸し出す。その傘は失うことはなくて、いつか貸した人の家にはちゃんと帰つて来るといふ。事務長官は大正院という。

※ **国侯** 藩主井伊氏。当時の藩主は、直弼の長兄直亮。

※ **しろしめし** 「おほしめし」の意か。

※ **講中** 根本山山神信仰者が参詣・奉加などの目的で作つた団体。近世根本山山神は、上野国南東部・下野国南西部の人々から、さらには江戸でも信仰され、その講社は大正院に所属していた。

※ **別当** 元來は本官のある者が別の役を兼ねて当たる意。宮廷・社寺などの事務長官。藤倉家がその任にあつてた。

※ **大正院** 根本山神社の里宮として麓に置かれた。弘化二年（一八四五）焼失し、古文書・

古記録いっさい失った。後年、大正院は桐生川ダムに沈むことになり、桐生市梅田町一丁目に移転された。

根本山道標（桐生市梅田町一丁目所在）

『桐生市史』中巻より

根本山神社は戦国末期の天正年間（十六世紀末）に天台宗派修験の霊場として開山されたという。江戸後期に参詣客が多くなると、道標が建てられ、案内書が発行された。



「根本山参詣飛渡里案内」表紙（安政六年発行）

『桐生市史』中巻より

「ひとり案内」には、江戸から根本山神社への行程が示され、各宿場間の里程、宿泊所、休憩所、飲食店などが提示されていた。



その後の根本山神社

『毛武遊記』に沿って華山と歩く桐生と周辺の旅』によれば、弘化二年の大火による痛手から根本山神社を再興する資金を得るため、安政七年（一八六〇）江戸での出開帳が許可され、行列が出発したが、熊谷宿に到着したところで、領主の老井伊直弼が暗殺され、出開帳は中止となり、神社の再興はならなかった。

明治以後は、神社の社地も信仰も縮小した。現在は、岩稜に木造の社殿と鐘楼が建ち、その上部の岩場に奥宮の石祠があるという。

玉上甚左衛門来る。所蔵の書画を持来たり示、可レ記ものなし。たゞ窮楽、成寫菅卿の書あるのみ。たゞ建涼岱の書画尤も多し。こは甚左衛門の父玉江といえるは、歌をこのミ涼岱とこゝろやすきをもて、その家には数々往来して幾夜宿せしかば、往復の書より書捨しものさわなり。即二紙を乞ふ。

玉上甚左衛門が来た。所蔵している書画を持ってきて示すが、記すべきものはない。ただ亀田窮楽、成寫菅卿の書があるだけである。建部涼岱の書画が最も多い。これは甚左衛門の父玉江という人が、歌を好み、涼岱と心易いため、その家にはたびたび往来して幾夜も宿泊したので、往復の書簡をはじめとして書き捨てたものもたくさんあるのである。そのうち二つをいただいた。

- ※ 玉上甚左衛門 第六回（29号）参照。
- ※ 窮楽 亀田窮楽。一六九〇〜一七五八。京都の

書家。名は曳尾、通称は九兵衛。

※ 成寫菅卿 不詳。儒者の成島俛卿とすれば、名は良讓、字は俛卿、号は筑山、生没年は一八〇二（または〇三）〜五三（または五四）であるが、それでは当時約三十歳で、その書をとりにて記すか疑問で、別人ではないだろうか。

※ 建涼岱 建部綾足。一七一九〜七四。江戸時代中期の俳人・文人・国学者として活動し、画家としても秀でた。建部綾足は雅名で、本名喜多村金吾久域。俳号涼岱。弘前藩の家老津軽政方の次男。二十歳の時弘前を離れ、放浪生活に生涯を送った。

※ 玉江 玉上玉江。二代甚左衛門。桐生新町で織物の製造と買次商を営み、余暇に書道をたしなむ。文化九年（一八一二）没。

※ さわなり たくさんある。

茂兵衛母のために小障に画く。夜佐羽清助蘭溪、邀飲。荒井玄圃といふ医人來話。これハ佐羽一統のちなミある人のよし。玄圃名は東市、字伯虚、号江村、桐生六丁目に住す。里中の事を話、頗委し。

茂兵衛の母のために小さなついでに描いた。夜佐羽清助蘭溪が来て、酒をあびるほどたくさん飲んだ。荒井玄圃という医者が来て話をした。これは佐羽家一族に縁のある人ということだ。玄圃の名は東市、字は伯虚、号は江村といい、桐生（新町）六丁目に住んでいる。里中のことを話し、たいへんくわしい。

※ 小障 小さなついたてのこと。

※ 佐羽清助蘭溪 前号参照。

※ 荒井玄圃 新居玄圃。桐生新町の医者。余暇に寺子屋を経営。弘化二年（一八四五）没。

石田要助に逢ふ。要助年二十余、三経と号す。詩を蘭溪に学ぶ。

石田要助に会う。要助、年は二十余歳、三経と号す。詩を蘭溪から学んだ。

※ 石田要助 三経と号し、漢詩をたしなむ。後出の石田常蔵の弟。嘉永三年（一八五〇）没。生年は不詳であるが、華山と会った時に「二十余」と本文にある。

十九日 晴

小障に画く。蘭溪折簡して酒樓にまねき飲せしむ。此楼は鮫屋市右衛門とて、奥山昌庵があれミに逢、業をなすものなり。小妓あり。樓ハ街をはなれ田の中に構、いとわびし。肴は鯛麵、につけ、さしみ。予はじめて此に來をもて、こがねとらせて帰る。

十九日 晴

小さなついたてに描く。蘭溪が手紙をよこして（私を）料理屋に招き、酒を飲ませた。この料理屋は鮫屋市右衛門といて、奥山昌庵の援助によつて事業を行っているものである。幼い芸妓もいる。料理屋は街を離れた田の中に構えており、たいへん寂しい所にある。肴は鯛麵、につけ、さ

みであつた。私は初めてこの店に來たので、ちよつとした額のお金を置いて歸つた。

※ 折簡 小さく切つた紙に書いた略式の手紙。官を任免するときの書札もそう呼ぶ。

※ 酒樓 酒を出す料理屋。料理茶屋。

※ 鮫屋市右衛門 不詳。

※ 奥山昌庵 前号参照。

※ 小妓 まだ年若く一人前にならない芸妓。半玉。

※ 鯛麵 ゆでたそうめん、煮た鯛の肉と汁をそえて盛り付けた料理。地方によつては、そうめんの中に鯛の焼き身を入れて煮たものをさす。

※ こがね（小金） ある程度まとまつた額の金銭。ちよつとした額の金。

醉後蘭溪のやどりにて茶を喫、書籍を見る。蔵するところわづかに陸放翁全集、宋詩鈔類腋此書六七年前所購、其値七兩といふ、新齋譜記等なり。法帖草行のもの一二のミ。此郷これをもて蔵書にほこる。可_レ笑なり。

酔つた後、蘭溪の家へ行つて茶を飲み、書籍を見た。所蔵しているのは、わずかに『陸放翁全集』、『宋詩鈔類腋』（この書は六、七年前に買ったもの、その値段は七兩という）、『新齋譜記』等である。書の手本類は草書、行書のものが一、二あるのみ。この郷ではこれでもって蔵書家と誇る。笑つてしまふ。

※ 陸放翁 前号参照。

※ 宋詩鈔類腋 詳細は不明であるが、「宋詩鈔」は宋代の詩人八十四家についての詩書で小伝・品評が添えられているので、その注釈の類であらうか。

※ 新齋譜記 不詳。梁の呉均撰「続齋譜記」のことであらうか。

※ 法帖 先人の筆跡または碑文などを習字の手本や鑑賞用に模写、臨写したもの。

※ 可笑 当時の華山の蒐集書籍は約五千冊だったので、こう記したのであらうが、失礼な表現のように思える。多くの人に読まれることは予想しないで、私的感想を気軽にメモ書きしてしまつたのであらう。なお、蘭溪は分家であり、佐羽本家にはもつと多くの蔵書があつたという。

出て石田常蔵といふものを問ふ。九野と号、詩を作り、画を好む。業は紋ひろひとて織もの、紋のあやを考ひいだせるなり。いとたくミなるものにて、自らこの紋かの紋と形の奇佳なるを撰ミ、い（た）ちまちに界引せし白紙に墨もてかたちを画き、又その界引せし一けたの中にはりもて印を穿ち、それを当てに一とつ一とつにたていとあやをとりて横糸を通し、たとえばふたえの丸き紋をひろはんに

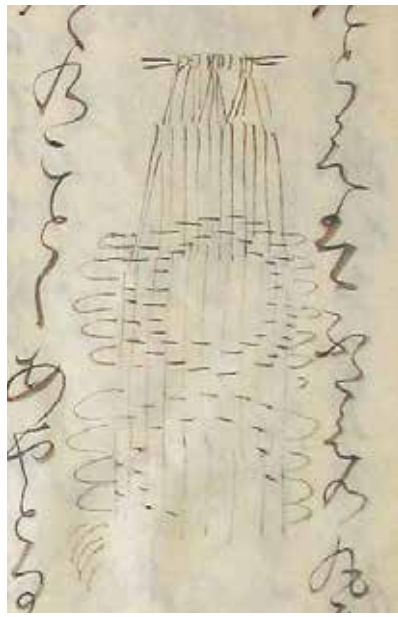
（蘭溪の家を）出て、石田常蔵という者を訪れた。九野と号し、詩を作り、絵を好む。家業は紋ひろいといつて、織物の文様を考え出すことである。たいへん上手なものであつて、自らこの紋かの紋

と、形の珍しいものを選んで、たちまちに罫線を引いた白紙に墨でもって形を描き、またその罫線を引いた一つの枠の中に針でもって印の穴をあけ、それを目当てにしてひとつひとつ縦糸の模様をとって横糸を通し、たとえば二重の丸い紋を作るには、

※ **石田常蔵** 一八〇六〜六一。織物図案家。紋工家。本名星、通称常蔵。桐生新町五丁目出身。二代目小坂半兵衛に師事。精巧な織物を多数案出し、桐生広帯の名を全国に広めた。九野と号し、画家、漢詩人としても有名。

※ **あや** 模様や色合い。
 ※ **界引** 罫を引いた。

紋ひろいの図

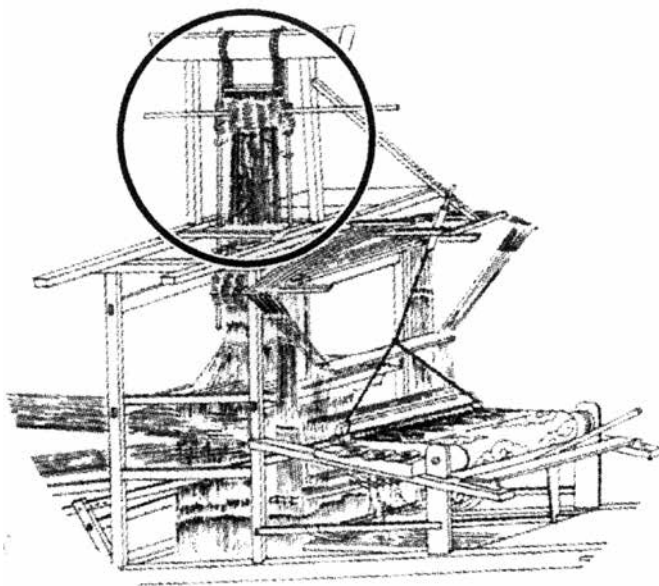


高機

『毛武遊記』に沿って華山と歩く桐生と周辺の旅（渡辺華山と歩く会、岡田幸夫代表）によれば、華山が描いた紋ひろいの図は、次に示す図の円の

部分のスケッチという。同書は、高機について次の説明文をつけた後に、図を載せている。以下に説明文と図を転載。

「江戸時代の桐生で一般に使われていた高機（紋織機）。長い経糸は筒状のドラムに巻かれて準備される。右に織り手が座る。助手が高い所で選択的に経糸を上げ下げし、その間に横糸を通すことで複雑な紋様を織り出す。後のジャガードの原型となるものである。」



かくのごとくあやとるなり。此あやをとりて機おるものに遣すなり。さて織ものハ機の手にており、此紋を引ものハ機の上のほりて、此あやを引なり。あやの引き様は何の苦もなき事に

て、たゞ此あやいと活用せるを、織るものも又心なくあがりさがりたる糸の間え梭をいる、なり。たゞ紋の色の種々にかはるは、織もの、かたに心あるなりとぞ。

このようにして模様をとるのである。この模様を作って機織りする人に渡すのである。さて織る人は機の手によって織り、この紋を引く人は機の上のほりて、この綾を引くのである。綾の引き方は何の苦もないことであって、ただこの綾糸を活用するだけで、織る人もまた無風流に上がり下がりしている糸の間に梭を入れるのである。ただ、紋の色が種々に変わるのには、織る人の方に風雅の心得があるのだという。

※ **紋を引もの** 空引機の上に座り、大通糸を引く経糸を上げて、紋様を織るための梭道を開ける作業。織り手を助ける者。
 ※ **心なく** 風雅心、風流心のないこと。
 ※ **梭** 横糸を梭口に通すための機織り用具。

此夜九野と茶話しかえる。

この夜は九野と茶飲み話をして帰った。

(続)

「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について



公益財団法人
華山会では、郷
土の偉人渡辺華
山先生の功績を
後世に伝承する
事業の一環とし
て、毎年市内小
学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子
をプレゼントしてまいりました。感想文の募集
を行ったところ、三百九件の応募をいただきました。

この中から優秀賞に選定されました六点の作
品をご紹介します。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を
いただきました各学校の先生方々に厚くお礼申
し上げます。

公益財団法人華山会事務局

「渡辺華山」を読んで

泉小学校 六年 鵜飼紗奈

とても貧しい暮らしだったけれど、一生けん命に学問
を学び、人のためにつくした人、それが渡辺華山だと、
私はこの本を読んで知りました。渡辺華山は、吉田松陰
よりも前に、日本にも異国の文化を取り入れなければな
らないと考えた人とも言われています。田原藩の武士と
して生まれた華山が、どうしてそんな考えをもったのか
知りたいと思いました。

私は、華山の生きた時代の貧しいとはどんな感じだろ
うと考えました。家のために毎日お金をかせがなければ
いけない。食事もあり食べられないし、家族のための
薬も買ってあげられない。自分のやりたい勉強もなか
かできない。そんな中で必死に生活し、勉強した華山の
い大さを感じます。華山の毎日は、次のようだったと書
かれています。朝四時に起きて、今日は何をするか、計
画を立てます。午前中は、本を読んだり、剣道をして体
をきたえたりします。人に頼まれた絵も書きます。昼か
らは、殿様に仕えたり客に会ったりします。古い絵の勉
強もします。夜は、本を読んだり、文や詩をつくったり
します。このスケジュールを見て私は、仕事や勉強の時
間ばかりで自分の自由な時間がないということにおどろ
きました。私には、そんな毎日続けることはできない
と思います。

渡辺華山は、貧ぼうな田原の人を大切に思っていて、
いざという時にうえ死にしないようにとお倉をたて、た
くさんのお米や麦をためておきました。天保の大ききん
が起きた時、作物はめちゃくちゃになり、各地でうえ死

にする人がたくさんいました。華山は、「百姓があるから
こそ殿様も何不自由なくせいたくをすることができ
る」などの内容の書き物を出し、お百姓を大事にしたので、
田原藩ではうえ死にする人が一人もいませんでした。他
にも、お金がなくなり、働けなくなってしまうた魚屋を、
もう一度商売ができるようにするなど、華山に助けられ
た人はたくさんいて、みんな感じきして心から華山をう
やまったそうです。

私は、渡辺華山の優しさはすごいと思いました。自分
の暮らしがよくなって人も人のためにお金を差し出してあ
げたり、食料を分けてあげたりすることはなかなかでき
ません。私だったらきつと、自分のことばかり考えてし
まうと思います。でも、人々の喜ぶ姿を見たらうれしい
んだらうなと思いました。だから、日本の人々のため、
日本のしょう来のために、異国のことをしんげんに考え、
勉強し、異国の文化を取り入れなければならないと考え
たのだと思いました。

私は、「渡辺華山」を読んで、私達の地元田原にこんな
すばらしい人がいたなんて初めて知りました。ほこりを
もちたいです。そして私も、渡辺華山のように清い心
をもって、相手のことを思いやり、何事にも努力してい
きたいと思います。

「渡辺華山」を読んで

童浦小学校 六年 鵜飼七瀬

私は今まで、渡辺華山という人の名前は知っていたけ
ど、どんな人でどんな人生を過ごしたのかは全く知りま

せんでした。だから、担任の先生から「渡辺華山」の本をもらったときは、華山先生の生がいを知ることができるとに、ワクワクドキドキしていました。

華山先生は、いつでも努力し、勉強にはげみ、そして誰にでも優しくふるまっていたので、まわりの人たちから厚く信頼されていました。

自分が優れた知識や絵の才能をもっていたのに、それでもなお努力を続けた華山先生を私はすごく尊敬し、見習いたいと思いました。今の私は、勉強にしろ、習っているピアノやテニスにしろ、ある程度わかったりできたら「これぐらいできればいいや。」とそこで満足してしまいません。でも、華山先生のように常に向上心を持ち続け、努力すれば、できないこともいつかできるようになると思いました。

そして、いつもめげないことも大切だと思います。私はいつもいつも、いやなことや自分にはムリだと思ってしまうことがあると、すぐにあきらめてしまいます。華山先生は、どんなにつらくても、いつもめげずに頑張っていました。だから私も、華山先生を見習って、今よりも、もっと前向きに、どんなときも頑張っていきたいと思えました。

努力を続けること、めげずに頑張ることも、どちらも大変なことだと思いますが、少しずつ意識して華山先生のような、立派な人になりたいと思います。

華山先生をそんけいしているもう一つの話は、誰にでも優しく、いつも相手の立場に立って考えていたことです。「百姓があるこそ殿様がある。殿様があるから百姓があるのではない。百姓は国のもつである。」と、農民をうやまうことを殿様にうったえたり、みんなのために報民倉を建てたことに私は強く感動しました。身分の違い

が大きかった時代に誰にでも優しくすることは簡単でできることではありません。華山先生の生まれもった優しい人格、人民は平等だという強い思い、そしてそれを実行したからこそ、みんなにそんけいされて、信頼されていたのも、納得がいきます。私もそんな華山先生のように誰にでも優しくふるまい、常に相手の立場に立って考え、行動できる人になりたいです。

私はこの本を読んで華山先生の人生はともつらかっただろうと思いました。

特に華山先生が正しくて、何も悪いことをしていないのに、牢屋にいれられてしまったところは私もつらくなっていました。

いつも努力をし、自分のことよりも他人を大切にしていた華山先生。私達が住んでいる田原に、こんな偉大な先生が生きていたことをほこりに思います。そんな華山先生の生がいを知ることができたので、この本と出会えてよかったです。今度は、田原に残る華山先生の足あとを実際に見に行きたいと思えます。

この本を読み、華山先生から教わったことを、これからの人生に生かしていき、華山先生のように立派な人になんとしても近づきたいです。

郷土の偉人 華山先生

田原中部小学校 六年 神藤 奈菜

華山先生は、寛政五年の秋、江戸で生まれた郷土の偉人です。

華山先生は、努力家です。家の暮らしを支えるために、

学習を頑張ったり、絵を描いたりして、生活するためのお金をかせぎました。兄妹は、それぞれ寺奉公や女中奉公に連れて行かれ、はなればなれになってしまいました。その中でも華山先生は、弱音をはずしにしっかりと現実を受けとめていました。私なら、妹と別れ、生活が苦しいけれど、ひどく落ち込んで何もやりたくなくなるだろうけど、華山先生はちがいました。華山先生は、どんなに悲しいことがあっても、いっさい弱音をひそませませんでした。すごく心の強い人だと思いました。私も、つらいことや悲しいことがあっても、華山先生のように弱音をひそかす、何事にもチャレンジしていきたいと思いました。

また、華山先生は人がからも良く、思いやりのある人です。天保のきさんの時、報民倉を作って死者を一人も出さず、お金のきさんの時、報民倉は、みんなが飢え死にしないように、報民倉を建てようと計画しました。みんなの命を一番に考えたから多くの人に信じられ、報民倉が協力して作られたのだと思います。自分一人のことだけでなく、みんなのことを考えて行動している姿は、とてもすばらしいと思います。一方、私は日々の生活の中で、華山先生のように周りのことを考えて行動しているのか。学校での生活やクラスでの役割、町内で過ごす時など、自分の行動を振り返ってみました。私は、自分の楽しさや満足だけで、周りの状況や相手の気持ちを受け止めながら行動できていなかったと思います。下級生や同級生から信じられる人になれるように、相手の話をしっかり聞いたり、困っている人に自分から声をかけたり、周りの状況を確認したりして、自分の考えを持って行動したいと思います。

華山先生が亡くなる前、自分に対するうわさや悪口については気にせず、周りの人に迷惑がかかるのを何より

も心配していたといえます。自分がものすごく不利な状況にあるのに、周りに危害が加わることを一番気にしていたなんて、本当に、周りのことを最も大切に考えている人だなど思いました。華山先生は、自分の手で自分の命を終わらせてしまいました。母や妻、子供に思い残すことがたくさんあったと思います。その気持ちを考えると、とてもつらく悲しいです。華山先生の人思いなところ、家族思いなところを、私も見習っていきたいです。

私は、この田原中部小学校で楽しく学校生活を送っています。中部小校区には、華山先生に関する多くの教えがあります。校歌の歌詞にも登場したり、毎年伝統の華山劇を上演したりします。尊敬する華山先生にゆかりあるこの田原中部小学校の児童でよかったなと思います。私も華山先生のように、こつこつと努力し、何事にもあきらめない気持ちを持って行動していきたいです。

「少年物語 渡辺華山」を読んで

神戸小学校 六年 大羽 秀 幸

僕はこの本を読み、渡辺華山のことをたくさん知ることができました。

僕はこれまで、華山を武士だと思っていましたが、武士に留まらず、家老まで務めていたことを知りました。また、政治をしながら勉強に励み、学者や画家としても活やくしており、全く予想外の人でした。人よりも先のことを考えたり、悪口を言われても、自分の意見を曲げることなく、つらぬき通したり、人を思う優しい心をもっていたことも分かりました。

文化元年、しげきな出来事があります。華山が十二歳の頃、日本橋辺りで、備前池田公の若君の行列にぶつかってしまったのです。自分の殿様や父の名前を聞かれましたが、自分の責任を感じ、決して言わなかったので、乱暴を受けてしまいました。このくやしい思いから、大乱暴を受けて殿様の上に立とうと考えました。華山の、将来の目標を見つめる姿に、僕は感心しました。僕と同じ年頃なのに、考えが深く、大人びていると感じました。

華山は、学問や絵の勉強を一生けん命する一方、田原藩にも心から仕えました。華山が先のことを考え、人民のこと、田原藩のことを考えていることが分かるものに「報民倉」があります。これは、天保七年の大ききんの時に効力を発揮します。

貧乏で名高い田原藩で、飢え死にする人が一人もいませんでした。しかも、報民倉へ入った穀物の第一号は、華山が絵を売って手に入れた米十俵です。華山が口だけでなく、行動でも人々の手本となる人だと思いました。また、自分が貧しい暮らしをしているのに、心が広いと思いました。華山は、困っている立場の人のことがよく分かるので、人民のためになる政治をしようと考えたと思います。努力家で、人の心が分かる華山には、家老の職がふさわしいと思いました。

華山は、日本の将来のことも考え、心配していました。そのため、「慎機論」を書き、幕府によって厳しい処罰を受けました。ひろく日本のことを考えているのに、幕府に理解してもらえず残念でした。そして、殿様に迷惑がかかると思い、家族のことを心配しながら、命を絶つたことに、心が痛みます。

僕は、月に一回、茶道を習いに池ノ原公園へ行つてい

ますが、この本を読んで、改めて訪れると、さみしさを感じました。華山の銅像を何度も見ていますが、このように田原や日本のために考え、思いを尽くした偉大な人だとは知りませんでした。僕は、華山は田原のほこりだと思えます。この銅像を見ると、華山は他界していますが、今でも僕たちの心の中に生きているように感じます。

努力で夢を叶える

野田小学校 六年 亀 田 莉 空

渡辺華山先生の人生は、いろいろな苦難がありました。しかし、その険しい道から逃げ出さず、命をかけて立ち向かう強い人だと、ぼくは思いました。それだけでなく、周りの人に情けをかけ、公平にやさしく接することのできる人だと思いました。そんな華山先生を尊敬しました。ぼくもそんな生き方ができたらいいな。これから、どんなことを積み重ねていったら、そうなれるのか、考えました。

華山先生は、子どものころからとてもおとなしかったそうです。しかし、悪口を言われてもがまんできたそうです。ぼくが同じめに合ったら、手を出してしまうかもしれません。なぜなら、自分のことをばかにされたと感じるからです。華山先生ががまんできたのは、人から言われた悪口も受け入れようとしていたのか。そして、直していいこうと考えていたのか、と思いました。華山先生の人をにくまない、広い心に気づきました。

華山先生は、貧しくて、くらしに困っている魚屋さんに、もう一度お店を開くお金をめぐんであげました。それだ

けでなく、そのお札に魚を持ってきた魚屋さんに、その魚を買ってあげ、

「これを明日の元手にしなさい。」

と言ったそうです。それだけでなく、自分の描いた絵を売って、田原の人たちのためにお米を寄付しました。相手のつらさをわかっただけでなく、立場を考えて、ためになるうと行動できるところをばくも見習いたいと思いました。

また、華山先生は、身近な人のことだけでなく、日本の発展についても考えていました。日本の人たちが平和に、不自由なくくらせるように願っていたのではないかと思います。華山先生のその行動のおかげで、今のぼくたちのくらしがあるのだと思います。華山先生のように、国のために命をかけることはなかなかできないけれど、ぼくは、戦争や争い事が二度と起らない日本にしたい。そのために自分にできることを考え、行動したいです。

華山先生が、殿様に教えられるほどの立派な人になるうと志を立てたのは、今のぼくと同じ十二歳のころです。このことが、華山先生を強くて、やさしい人に導いたと思います。ぼくの志は、何だろう。ぼくは、プロ野球選手になりたいと、三年生のころから思っています。そのために、毎日、タオルを使ってシャドーピッチングをしたり、素振りをしたりしています。苦しい練習も自分のためだと考えて、がんばっています。華山先生のように、親に言われてからやるのではなく、自分からがんばりたい。努力を積み重ねていきたいと思えます。そして、自分のもっている力を、最大限に発揮していきたいです。そして、お金をかせげるようになったら、華山先生のように、人のためにできることをしたいです。そして、そ

ん敬される人になりたいです。

渡辺華山

童浦小学校 六年 澤野芽生

私は渡辺華山先生のことを知って一番はじめに思ったのは、とても強い心の持ち主だということです。それも、華山先生の生がい、そのとき思ったこと、起こした行動などを知っていくうちに、どんどん強く思うようになってきました。

華山先生は、幼い頃から貧乏で弟や妹たちとも生き別れになり毎日の生活も大変でした。

現代は服やふとん、食べ物など、なんでもすぐ手に入ります。大人は働き、子供は勉強にはげむ。それが今の社会においてみんなの仕事で、ふつうのことなんです。でも、華山先生たちにはどんなにお父さんが働いて、どんなにお母さんが家事をして、どんなに子供たちが勉強しても、くらしは安定しませんでした。そんなにかくでつらい状況でも、華山先生はあきらめずに、逆にもっと上を目指そうとがんばってつばな人になろうというころざしで、どんどんつばな人になっていきました。わたしは、お金持ちの家に生まれた訳ではないけれど、欲しいものは買ってもらうこともできるしわがままを聞いてもらうこともできました。でも、そんなわたしは強い心などもっていませんでした。すぐに小さなことでもあきらめてしまう。新しいことにちよせんする勇氣もない。つらい道より楽な道の方を選んだり、わたしは強い心より弱い心の方を持っていると、華山先生

の人生を知った後に思いました。自分の生活を見直してみると朝起きてだらだら過ごして、ねる時間になったらねるという生活をたたくりかえしていました。

華山先生とはまるでちがう、真逆の生活をしていました。自分はどうしてそうなのか、そこまぢがうのかと考えると少し自分がいやになりましたが、きつとこういう思いや考えが弱い気持ちなんだと気付きました。

華山先生のことを知って、自分はどれだけ小さなことでなやんでつまづいたりあきらめて途中で進むのを止めたたりしたんだろうと思いました。そんなことじゃ、わたしはもし華山先生と同じ運命をたどっていたら、きつとたえられなかったし、りつばな人になれなかったと思います。

私は華山先生をとてすごい人だと思っていて、もう亡くなつてしまっているけれど、とてもそんけいしています。

わたしは、渡辺華山先生のことを人生という長い道のりの道しるべとして、これからもなにかをあきらめようとしたときには華山先生のことを思い出して、精いっぱい生きていきたいと思えます。



華山の田原行（十九）

二月二十一日（続）

この日は、前回紹介した藩士のほかに間瀬雲叔や西光寺の信亮院も華山のもとを訪れます。信亮院は、二月九日に華山に弟子入りし、十六日に続き、臨本をもらいに来ます。間瀬雲叔は桜を一枝持って華山を訪れます。二月二十一日は旧暦で、今の暦にすると春なので、桜は咲いています。

間瀬雲叔は、取次役・間瀬舎人の父で、「若木の桜一枝駿河御番の時賜りたるといふ花壺にさしておくる。」と、駿河御番の時に拝領した花壺に挿したようです。雲叔の配慮を華山は喜んでいました。

駿河御番とは、江戸幕府の職制である駿府加番のことで、駿府城代を補佐し、駿府城外の警護を行っていました。大名一名と寄合旗本二名が交代で務めました。加番は、大坂城にも置かれていて、田原藩では、駿河加番も大坂加番も勤めています。

この時の駿河加番は、「三宅氏御系譜」（『田原町史』中巻一一九一ページ）に、「元禄六四年五月廿六日駿府加番被仰付、九月五日出立。」と、五代藩主康雄（一六五九〜一七二六）が元禄六年

（一六九三）に勤めたとあります。

元禄六年の『萬留書帳』（『田原藩日記第一巻』）によると、「駿府へ御家中衆発足、是者伊東信濃守様駿河にて御死去二付、於江戸四日二御城へ殿様被為召、御老中御列座にて早速御登被成候様二と仰渡御座候て、五日江府御発駕之旨六日二申来。御領内より夫丸廿式人前々御番之節より相定、郷村より罷出候。切米等も村々もたいにて候。」と、前任者の伊東信濃守が亡くなった後任として任命されたようです。伊東信濃守とは、備中岡田藩第四代藩主伊東長貞（一六四三〜一六九三）のことです。駿府加番任務中の元禄六年九月一日に亡くなっています。その後一週間足らずでの任命ですから、ずいぶん急な任命だったようです。

任期は翌元禄七年までだったようで、元禄七年の『萬留帳』（同）に「一、同（九月）二十七日駿府御番所より御弓、鉄炮並御家中衆到着、辰之刻着にて候。」と、藩士が駿府加番を終え、田原に引き上げてきた時のことが書かれています。弓や鉄砲を伴ったことから、駿府加番が警護の仕事であることが分かります。

このほか、時代は異なりますが、田原藩は、馬場先御門番や一ツ橋御門番など江戸城の各門の警固も命じられています。

大坂加番を命じられた大名が、日光祭礼奉行に

『全楽堂日録』の書き出し



なる例も珍しくなく、田原藩も、日光祭礼奉行を命じられたことがあります。

日光祭礼奉行は、家康の命日である四月十七日に日光東照宮で祭礼を執行する役で、一万石級の譜代大名が命じられます。実は、ここで紹介している『全楽堂日録』は、文政十三年（一八三〇）四月十三日、「君台祀事趨日光山登、倍従焉」（『全楽堂日録』）と、日光祭礼奉行を命じられた十四代藩主康直に華山が随行するところから始まって

います。三〇丁ほどに日光までの日光街道や道中の様子の記述や日光でのスケッチがあり、さながら、日光街道道中記といったところです。この後、『全楽堂日録』は、半年後の文化十三年十月二十七日の江戸での記述から再開され、日光での様子が述べられていないのが残念です。

田原藩にとって日光祭祀奉行拜命は、「内事雑費之資に乏しければ其役々のもの皇倉す。」(同)と、資金のやりくりに苦慮し、「姫路の邸にいたり半ハ調しける」(同)と、康直の生家の姫路藩に用立ててもらうほどのものでした。実際に道中では、休憩に五百疋(百疋で一分、四分で一両)、宿泊で三百疋、利根川を渡るのに謝礼を含め二両二朱等、出費について記されており、田原藩にとって大きな負担となったことが分かります。華山が細かに記したのも、「かやうの瑣々たる思いどもいやしき事どもを記すハ、今の御風儀の無下におとりたるを、後のいましめにもとなり、すべてこの日記のこゝろ也」(同)とあるように、今後の参考にするためらしいです。華山の著述に、記録に関する記述が多いのも、この「後のいましめ」という執筆の目的のためかもしれません。なお、華山が「今の御風儀の無下」と記しているのは、康直一行を見送りにきた藩邸に出入りする人に「こがね賜りてねぎらひ玉ふ」とお礼をしたのに、

「其数の多少をも論じ」とか、宿泊代に相場の二百疋を出したのに、宿の主人が納得せず「難儀のよしを訴」え三百疋支払うなど、華山自身がこの旅で経験したことをさしています。

二月二十一日の記述にもどります。この日は、来客だけでなく、「金田丈左エ門、河合衛守、岡田森助、板倉矢駄羅、川澄氏を訪ふ。」「夜、平山喜太郎を訪ふ。」と、多くの藩士の訪問もしています。

また、龍門寺石峰和尚のために龍をかいいたり、江戸の家族に手紙を書いたりします。この手紙は、明日江戸に行く佐藤千左エ門に海苔百帖とともにあつらえます。

二月二十二日

前日の佐藤千左エ門が春屋(つきや)賄として江戸に赴くことを記しています。春屋賄がどんな役職がよく分かりませんが、江戸城に米を精米する「春屋勤」という仕事があったことから、賄(食器食材の調達管理)と精米を兼ねた藩邸の台所方といったところでしょうか。

次に華山は、「我手即天下之手我身即滕薛之宰」と、自分の手を「天下之手」、自分の身を「滕薛之宰」と例えています。これだけの記述なので何を言いたいかわかりませんが、「天下之手」

とは、絵を描くことに優れた才能があるということでしょうか。また、「滕薛之宰」は、田原藩という小さな藩の家老という意味でしょう。「滕薛」の所を「侯家」と書いて消してあるので、「滕薛」の方がふさわしいと考えたのでしょうか。「侯」は「侯」と同じで大名家を意味します。

滕と薛は、周代の諸侯国で、論語憲問第十四に「子曰孟公綽為趙魏老則優不可以為滕薛大夫」(子曰く、孟公綽、趙魏の老となれば則ち優れり、もつて滕薛の大夫となすべからず)とあります。直訳すれば、「孟公綽は、趙や魏の家老になつても勤めることはできるが、だからといって滕や薛の太夫にはいけない。」となります。意味としては、「孟公綽は、魯の国の大臣を務めているので、同じような大国の趙や魏でも家老を務めることはできる。だからといって、小国の滕や薛の太夫が務まるかというとは務まらない。大国は下に人材がいれば家老は任せておけばよいが、小国は煩雑な職務が多く、すべて自分でやらなければならない。」といったところです。孔子は、実務処理能力がない孟公綽を大臣にしている魯の国の人事はおかしいことを批判していると思いますが、紀州難破船の問題をはじめいろいろな問題に対応し藩政を運営している華山にとっては、小藩の家老として務まっている自分は大藩の家老としても務まるという自信の表れでしょうか。



田原市博物館企画展のご案内

九月五日(土)～十二月六日(日)

企画展 写楽と豊国～役者絵と美人画の流れ

(企画展示室一・二)

展示解説 十一月十五日(日)午前十一時～ 副館長鈴木利昌

同時開催…愛知県美術館サテライト展示 20世紀日本の素描と版画、人物表現を中心に(特別展示室)

渥美郷土資料館企画展のご案内

十月二十四日(土)～十二月六日(日)

企画展 郷土ゆかりの書家たち

(企画展示室)

郷土ゆかりの書家、鈴木翠軒などの作品を展示します。

展示解説 十月三十一日(土)午前十一時～ 学芸員天野敏規

一月三十一日(日)～三月十三日(日)

企画展 第30回ひな祭り展

(企画展示室)

江戸時代から現代までのひな人形の

変遷を展示。

展示解説 二月十一日(木・祝)午前十一時～ 学芸員天野敏規

イベント 着物を着ておひなさま気分になろう 二月二十八日(日)

県内の博物館・資料館をめぐるひな祭りスタンプラリーを開催します

【賞品有り】

平常展のご案内

十二月十二日(土)～一月三十一日(日)

華椿系の花鳥画 (特別・企画展示室)

渡辺華山・椿椿山・山本栞谷・野口幽谷・渡辺小華作品などを展示します。

展示解説 一月十七日(日)午前十一時～ 副館長鈴木利昌

二月六日(土)～三月二十一日(月・祝)

渡辺華山の弟子たち (特別展示室)

渡辺華山・椿椿山・福田半香・小田莆川・斎藤香玉・椿華谷作品などを展示します。

ひな人形と初風展 企画展示室

田原の旧家に伝わったひな人形や田原風保存会制作の初風などを展示します。

期間中スタンプラリーを開催します。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展

一般 五〇〇円(四〇〇円)

平常時

一般 二一〇円(一六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

休館

渥美郷土資料館は無料

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日、十二月二十八日～一月四日

(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館

展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。
博物館だより(年数回)・華山会報
をお送りします。

華山会報 第三十五号

平成二十七年十一月一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 菰田稀一

事務局長 讃岐俊宣

〒四四一―三四二―一

愛知県田原市原町巴江二二の一

TEL 〇五三一・二二・一七〇〇

FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 山田哲夫

吉川利明 加藤克己

石川洋一 小林一弘

林 哲志 別所興一

中村正子 小川金一

柴田雅芳 中神昌秀

池戸清子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成二十八年四月十一日